

過去への好奇心は未来への展望  
明日を探るあなたに「埋文やまなし」

埋文シンポジウム2018を終えて

山梨県埋蔵文化財センターでは、去る2月17日・18日に防災新館1階のオープンスクエアを会場として、埋文シンポジウム2018「縄文時代の植物資源の利用・管理・栽培を考える」を開催した。2日間にわたるシンポジウムでは、県内外から約180名の参加者が訪れ、9名のパネラーによる最新研究に対し熱心に耳を傾けていた。



埋文シンポジウム2018の様子

近年の植物考古学研究の進展や良好な低湿地遺跡の調査によって、縄文時代の植物利用に関わる知見は飛躍的に深まっている。この背景には、高精度年代決定法(AMS)やレプリカ法などの新しい分析手法の導入によって、時代的に信頼性の高い資料が得られるようになったこと、光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープ、走査型電子顕微鏡、軟位X線やCTスキャンなどの分析機器を用いた解析の普及によって、植物同定の精度が飛躍的に向上したこと、低湿地遺跡における調査で、考古学研究者のみならず植物学など多様な分野の研究者が共同に関わる機会が増えてきたこと、実験考古学や民俗学を用いた技術の復元など、植物資源に関する多様なアプローチができる環境が整ってきたことがあげられる。

こうした研究の中で、縄文人によるクリやウルシなどの木本植物の管理や栽培、ササ類の高度な利用と加工、アサ、ダイズ、アズキ、エゴマなどの草本植物の利用や栽培などの実態が次第に明らかになってきている。

シンポジウムでは、個別植物の利用状況のみならず、縄文時代の人々が、どの程度、どういう形で植物に関与していたのかを議論し、植物によっては野生植物の利用を超えて人為的な管理が高度に進み、栽培というレベルまで及んでいることが改めて確認された。

一方で、縄文時代における植物栽培は、狩猟・漁労・採集などの生業基盤の一角には加わるが、それだけが特化した農耕の発達にはつながらなかったこと、地域・時代・遺跡の環境によってむしろそれらの四者が巧みに組み合わせられていたことが浮き彫りとなった。また、縄文時代の植物利用技術が現代の伝統技術にも連続する基層文化であることも再認識された。

本シンポジウムは、「縄文時代の植物資源利用を歴史的にどのように評価するか」という新たな研究段階の到来を感じさせる内容となり、開催趣旨に対し一定の役割を果たせたのではないかと考えている。

今回、多忙な中を发表いただいた各講師の先生方ならびに当日参加いただいた皆さまに心から感謝を申し上げたい。

山梨県埋蔵文化財センター 所長 中山誠二

埋文やまなし 第56号  
発行 山梨県埋蔵文化財センター  
〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923  
☎055-266-3016  
印刷 株式会社峡南堂印刷所

編集後記

たいへん、たいへん。収穫したばかりのママを転んでこぼしちゃった。ママが、埋文やまなし56号の誌面上にちらばっちゃった。おねがい！どのくらいこぼしちゃったか、みんな教えて。同じ種類のママは1個で教えてね。(池)



山梨の遺跡発掘展2018より

発掘調査担当者が語る平成29年度の発掘調査

山梨県では毎年、道路や学校等を建設するための公共工事など、開発事業に先立つ発掘調査を各地でおこなっています。この発掘調査は、開発などによって失われてしまう先人たちの営みの痕跡を記録によって保存するもので、調査の成果は「発掘調査報告書」として刊行されるほか、遺跡から出土した土器や石器などの資料は地域の博物館で展示されます。

平成29年度には、県内各地で157件の発掘調査(試掘調査を含む)がおこなわれました。このうち古墳時代から平安時代の窯跡の痕跡がいくつもみつかった韮崎市の御座田遺跡や、平安時代の和歌が刻まれた器が発見された甲州市のケカチ遺跡、二の堀と関係が深い集水井が出土した甲府城下町遺跡など、新聞などに取り上げられ、大きな話題となった遺跡が少なくありません。

山梨県埋蔵文化財センターでは、このような平成29年度の最新発掘調査成果を一堂に展示する「山梨の遺跡発掘展2018」を3月10日(土)から4月8日(日)まで、山梨県立考古博物館企画展示室で開催します。

今回の「埋文やまなし」では、山梨県埋蔵文化財センターがこの1年間におこなった発掘調査の中でも、「山梨の遺跡発掘展2018」で紹介したイチ押し<sup>しゅうすい</sup>の出土資料や遺跡の特徴を解説します。

- NEXT PAGE 発掘調査担当者が語る遺跡・出土資料 -

栽培植物は人為生態系の管理の結果として生まれた

縄文人が野生ママを利用していたことは疑いない

縄文中期以降のダイズは大型化した栽培初期段階の植物である

切り取って報告書を読む時のしおりにしよう！